# 海外派遣事業報告書 2014

## ミャンマー・マレーシア

公益社団法人

**北海道国際交流・協力総合センター**

# 目　次

研修事業概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

アルバム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

参加者レポート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

海外派遣研修団名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０

スケジュール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１

行動記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２

# 海外派遣事業報告書 2014

## ミャンマー・マレーシア

１　趣　旨

道内各地の青年を海外に派遣し、視察や関係者との意見交換などを通じて、本道との違いや地域社会のあり方などについて学ぶとともに、異文化や国際交流等に対する理解を深め、国際的な視点に立って地域づくりを進める人材を養成し、地域の国際化の促進に資する。

２　訪問国

ミャンマー、マレーシア

３　派遣対象者

北海道の青年（２０～４５歳程度）

４　研修内容

国際協力の実態と効果的な協力事業のあり方や、経済交流の実情を学ぶとともに、現地青年等との交流を行う。

・JICA、JETRO 事業の取り組み理解
・NGO、NPO の活動現場視察
・経済発展状況の理解
・青年交流（大学、子ども）

５　派遣計画

・訪問先　　：ミャンマー、マレーシア
・派遣人員　：７名（団長１名、団員６名）
・派遣期間　：平成２６年１１月２日（日）～１１月９日（日）８日間

６　参加負担金

１３万５千円

７　旅行主催

トップツアー株式会社

JICAミャンマー事務所にて瀬戸氏よりミャンマーと日本の経済発展の歩みについてレクチャーを受けた。

JETROヤンゴン事務所にて瀬川氏よりインフラ整備などのミャンマー経済の現状を視察した。

# ミャンマー

## 11月2日～11月5日

NGOジャパンハートが運営する子ども支援施設を訪問し、日本文化交流のひとつ、北海子ども盆踊り「シャンコ」を全員で踊った。

子ども支援施設「ドリームトレイン」にてミャンマーの子ども達と一緒に昼食。

ヤンゴン市街地の風景

# マレーシア

## 11月5日～11月9日

JICAマレーシア事務所芳沢氏よりマレーシアの多民族国家の抱える諸問題についての講義を受けた。

JETROクアラルンプール事務所田中シニアアドバイザーよりマレーシアにおけるハラル認証の現状についての講義を受けた。

マラッカ旧市街での昼食風景

マラッカ・マレーシア技術大学（UTeM）でのよさこい「よっちょれ」による交流風景。

UTeM日本語専攻学生さんとの集合写真。

## 平成２６年度　海外派遣事業について

海外派遣団　団長
北海道国際交流・協力総合センター〈 ハイエック 〉　交流・協力部長　加藤　修

ハイエックでは道内の有為な青年を海外に派遣し、関係者との意見交換や交流、視察等を通じ生活・文化の違いや国際交流・国際協力の現状等に関する理解を深め、今後の国際社会への対応が可能な人材を養成するため、海外派遣研修事業を実施している。

平成２６年度は団員６名を公募、１１月２日から１１月９日までの８日間にわたり、ミャンマー連邦共和国及びマレーシアを訪問した。

ミャンマーは、日本人には、かつては「ビルマ」の名でなじみが深く、ある種の懐かしさを感じさせる国でもある。長期間に亘り軍事政権が続いたが、近年、民主化の流れが本格化する中、国際社会との関係改善も大きく進展し「２０１４年：ＡＳＥＡＮ議長国」として大きな注目を集めた。

また、マレーシアは「ルック・イースト政策」により発展してきた有数の親日国家で、同じく近年は「ハラル・ハブ」として、さらには、２０２０年の先進国入りをめざした国家的プロジェクトに取り組むなど、両国ともに存在感を増しており、日系企業の進出や投資も活発で各国からの要人が頻繁に訪れる状況にある。

ミャンマーではＪＩＣＡ及びＪＥＴＲＯの両事務所、ミャンマー日本人材開発センター、ブリッジ・エーシア・ジャパン、さらには、平成２６年度外務大臣表彰を受賞したジャパン・ハートなどを訪問させていただき、ミャンマーにおける社会経済情勢や人道支援・自立支援をはじめとする日本の支援策の現状など、幅広い分野にわたり様々なお話しをお聞きした。

ミャンマー日本人材開発センターでは、日本式経営・生産管理手法を生かしたビジネス人材育成のあり方や、日本、とりわけ九州を中心にミャンマーへの先行投資が盛んに行われている現状など興味深いお話をうかがった。

ブリッジ・エーシア・ジャパンでは、深井戸掘削活動、住民自身による井戸の修繕や水管理マネージメント、地元青年を対象とした人材育成など、相互理解と信頼に基づき、地域の人々の自立を促す取り組みの重要性についてお聞きしたが、水を資源と感ずることなく豊富に使える日本での生活の有り難さに、今更ながらに感謝の思いを深めた。

ジャパン・ハートでは、貧困であるが故に両親や家族と離ればなれに施設で暮らさざるを得ない多くの子ども達たちとのふれあいがメイン。年長の子が小さな子の面倒を見る、食事の用意、片付け、皿洗い、洗濯など全て自分のことは自分でやるのが当たり前、かつての日本ではごく普通に見られた光景であったが、何故かひどく新鮮に映った。２００５年に開所、当初は２８名足らずであった子ども達は、現在、２１８名を数えるとのこと。この現実をどう捕らえるか。子ども達の何人かが、ちょうどお昼寝前の歌の時間であったが、部屋に入った瞬間、何とも言えない感情が私を捕らえ、私は一瞬、両眼に涙があふれ

るのを感じた。余りに唐突な出来事に戸惑いながら、それ以上、涙が出ようとするのを必死でこらえた。　～　上を向いて歩こう、涙がこぼれないように　～　子ども達は、確かに、そう歌っているのだ。派遣団を歓迎するために唱和させているのではなく、毎日の慣わしということであった。子ども達がその意味を理解しているのか否か知る由もないが、生きることにひたむきな、たくさんの小さな瞳を見つめた時、大きく心が揺さぶられ、不覚にも子ども達を抱きしめるという、およそ日本では思いもつかない行動をとってしまった。　派遣団が交流用に持参した塗り絵、剣玉、風船、コマなどのおもちゃに目を輝かせ、無心に遊ぶ子ども達。一方では、大きなハンディを背負って生きていかなければならない子ども達。こうした情景を目の当たりにし、団員達の胸に去来した思いはどのようなものであったか。

マレーシアにおいても同様に、ＪＩＣＡ及びＪＥＴＲＯの両事務所、そしてマレーシア・マラッカ技術大学（ＵＴeM）などを訪問させていただいた。シンガポールとの一体的な発展を目指す国家的大規模都市開発プロジェクトである「イスカンダル・プロジェクト」の概要や、「ハラル・ハブ」としての方向性を見据えた国家認証であるハラル認証システムの現状、併せて、今後のハラル市場へのビジネス展開に向けて積極的に取り組む日本企業についての話などをお聞きした。

マレーシア・マラッカ技術大学では日本語学科の学生との交流が主たる目的、到着した団員を出迎えたのは、学生達による民族楽器による唄や踊りのパフォーマンス。だが、時間の関係であろうか、予定されていたＤｒ．Ｚawiah binti Hj.Mat（ザウィア学科長）の歓迎挨拶、そして訪問団からの答礼挨拶等が割愛になったのは残念であった。交流の手始めは団員の手づくりフォトスライドによる北海道紹介のプレゼンテーション、その後、複数のグループに別れての懇談となった。緊張のためか、最初はなかなか会話が続かず、はじめのうちは団員・学生達、双方ともにぎこちなく戸惑いも見られたが、それもつかの間のこと、互いに打ち解けるにつれ日本のアニメなど、多くの話題で盛り上がった。そして交流は静から動へ。団員全員（勿論、ロートルの団長は除く）でのＹＯＳＡＫＯＩソーラン演武、最後はＵＴeMの学生も一緒になり、ともにＹＯＳＡＫＯＩソーランを舞う。全員での記念写真の後、大学で用意してくださった心づくしの夕食会、楽しい一時であった。今日の日本の若者には余り見かけなくなった青年期特有の幾分「はにかんだ」表情の学生達、控えめで「つつましさ」さえ感じさせる学生達、こうした学生達を好ましく感ずるとともに、反面、夢や希望へ向かって突き進む、若者の特権とも言えるエネルギーに多少のたじろぎを禁じ得なかった。

今年度派遣団に参加した団員達は、国際協力の仕事に関心を有する者、日本語教育の活動に従事する希望を有する者、食文化のあり方に興味を有する者など、それぞれの動機を有しての参加である。ＪＩＣＡ事務所やＪＥＴＲＯ事務所などでお聞きした数々の興味深い話、そして、実際の支援現場に身を置いた濃密な時間が一人一人の心に何かを深く刻み込むとともに、これまでの来し方、今後の行く末を見つめ直す機会となり、幾ばくかの糧

になったとすれば幸いである。

派遣団は社会人４名、大学生２名、男女別には男性２名、女性４名により構成され、近年の「女性が輝く社会」を先取りするような構成となったが、「日本という日常の生活空間」から離れた異邦の地で、ともに同じ空間に身を置き、ともに同じ時間を過ごすことにより、昨日まで名も知らなかった徒人との距離を多少たりとも近づけることができたであろうか。

派遣事業に参加された皆さんの今後の活躍を心から祈るとともに、ひともとの縁で繋がったであろう絆を大切に、これからも交流を深めていってもらえるよう切望する。

今回の研修で、様々な境遇の中、ある者は自らの人生を自ら選択し、ある者は自らの意思とは裏腹な人生を余儀なくされる、そうした現実を具に見てきた。時に人は否応なく自身の決断を迫られ、時に人は理不尽でも甘んじて受け入れなければならないことがある。しかし、いずれにしても、決して、人は一人で生きているわけではなく、また、一人で生きていくこともできないのだから。

今回、たいへんご多忙の中、派遣団に対応をいただき、貴重なお話をうかがったＪＩＣＡやＪＥＴＲＯをはじめ、ＮＧＯやＵＴeMなど様々な関係の方々に心から感謝を申し上げるとともに、ハイエックとしても、今後とも連携を取りながら、国際協力や経済交流の取り組みなどを通じて、本道の国際化の一層の推進に役立てていくことができれば幸いと考えている。

## ミャンマーマレーシア両国比較

川田　真美

### はじめに

11/2-11/9、8 日間にわたる海外派遣研修（ミャンマー・マレーシア・シンガポール）に参加させていただきました。渡航前、国際協力に関心はありましたが、現状についてはイメージできていませんでした。特にミャンマー、マレーシアの状況について記したいと思います。

### ミャンマー

現地時間 22:40 過ぎにヤンゴンの空港に到着、日本語ぺらぺらなガイドさんが迎えてくれました。ミャンマーに到着してまず驚いたのは日本車とクラクションの多さです。ガイドさんの話によると 9 割が日本車とのことです。日本車と言っても中古車がほとんどで、日本語表示をつけたまま走行しています。日本語表示を消すと価値が下がってしまうそうです。近年、車が急増し交通事故・渋滞は深刻な問題です。また至る所にしっかりとした体つきの野良犬が見受けられました。噛まれてしまうと狂犬病の危険があるので注意が必要のようです。

2 日目は朝から JICA ミャンマー事務所を訪問し、業務についてお話を伺いました。1981 年にミャンマー事務所が設立、現在 49 名のスタッフの方々が勤務されています。様々な協力活動がこれまで行われてきましたが、特に、2011 年テイン・セイン政権発足後に民主化・国民和解に向け進展がみられ外国との関係が改善して以降、支援が活発になりました。ミャンマーはまだまだ発展レベルが ASEAN の中で一番低いことが課題です。インフラ整備も課題の一つです。停電頻発（これは JETRO ミャンマー訪問時に経験しました。）水道水衛生状況、上下水道などです。特に停電は外資企業進出にも大きく影響しています。

10:30 過ぎ、ミャンマー日本人材開発センター（MJC）を訪問しました。こちらは 2013 年 8 月に開所されました。ビジネスを担う人材や組織をマネージメントしていく人材を育成することが目的となっています。日本企業役員の方を招いてセミナーを開くなど興味深い授業内容です。受講者の平均年齢も 35 歳と若く、中間管理職、女性も多いとのことです。訪問前は積極的な国民性のイメージがなかったので意外でした。日本ではいまだ男女格差が残っていますが、ミャンマーでは差別はないようです。むしろ女性の方が元気であるというお話を伺いました。ユニークな授業を取り入れるなど、他のスクールとの差別化を図り卒業生の評価も高いようです。

その後、昼食をとりながら JICA ボランティア調整員、シニアボランティアの方のお話を伺いました。現在ミャンマーで活動されているのはシニアボランティア 1 名のみで、作業療法士として国立リハビリテーション病院に配属されています。入院最大 65 床、外来 50～100 ですが病院、医者、療法士が足りていないとのことです。やはり言語、他スタッ

フの技術問題により日本と同じようにはできないとボランティアの方が仰っていましたが、仕事ぶりが院長および患者さんの信頼を受けているように感じました。

**マレーシア**

11 月 5 日、20 時過ぎにマレーシア・クアラルンプールに到着しました。KL 空港は黒川紀章氏の設計だとガイドさんより伺いました。こちらも街中日本車が走っていましたが、新車が多いように見受けられました。高層ホテル・ツインタワー・建設中のマンションなど多くありミャンマーとの差を到着早々感じることができました。

翌日朝、JICA マレーシア事務所を訪問しました。事務所はシティバンクのビルに入っておりセキュリティの厳しさに驚きました。受付にてパスポートを提示し、ビジターバッジをもらいゲートを通り向かいました。

1966 年に青年海外協力隊マレーシア派遣が開始されました。ボランティアの他にも技術協力・研修員日本受け入れ等があります。日本で研修を受けて帰国した後も同窓会が開かれたり、フィードバックなど JICA とのつながりは強いようです。草の根事業では酪農学園大学、帯広商工会議所の例が紹介され身近に感じました。

その後訪れた JETRO ではイスカンダルプロジェクト、ハラルについてお話を伺いました。特にマレーシアのハラルについては認証の厳しさを知ることができました。政府が認証を行っているのはマレーシアのみとのことです。認証を受けるまで長くて 2 年もかかり、認証後も年 1 回立入検査があり、違反していると罰則も適用されます。レストランでは食事は基準をクリアしていてもアルコールを提供していたら認証を受けることはできないそうです。近年日本でも関心が高まっており、2020 年までに早急な対応が求められます。

ツインタワーをバックに集合写真

**最後に**

開発段階のミャンマー、日々発展を遂げているマレーシア両国を訪問し比較することができました。ミャンマーが数年後にどのような成長・変化を遂げているのかとても興味があります。また現地の方の生の声を聞くことができ、確実に世界に対する私の意識は変わりました。

最後になりましたが、準備手配してくださった HIECC の皆様、団長・団員の皆様この場を借りて深く御礼申し上げます。

## 8 日間の海外派遣研修を振り返って

黒澤　幸

母校の大学を訪れた際、今回の海外派遣研修の広告を目にした。友人が姉妹都市間の交流で、海外へ行ったという話を聞いていたことも影響し、大変興味が湧いた。自分の人生の視野を広げる良いきっかけになるのではないかと期待を抱き、応募に至った。

### ミャンマーでの研修（11 月 2 日～11 月 5 日）

新千歳空港から仁川空港で乗り継ぎをし、ミャンマーのヤンゴン空港に到着した。空港に着くと、日本とは異なる香りがした。バスの窓から荷物を積む光景やホテルのエアコンの強さには衝撃を受けた。道路は渋滞しており、横断歩道はないため、歩行者は手を挙げて道路に飛び出し、車の間を通り抜けていく。車の車線変更も手と目で合図という点に驚いた。ミャンマーでは、JICA、ミャンマー日本人材開発センター（MJC）、JETRO、ドリームトレイン、Bridge Asia Japan（BAJ）などを訪問した。

最初の訪問先である JICA ミャンマー事務所では、ミャンマーに対する日本（JICA）の協力内容について教えて頂いた。国民の生活向上、人材育成・制度整備、持続的経済成長の 3 つの柱を基に様々な活動が行われていることを知った。基礎インフラ整備が不十分で、電力供給が安定せず停電が多いことや上下水の衛生的な問題など、日常生活に関わる課題が多いことがわかった。

MJC では、3 つの柱のひとつである人材育成を目的とした活動が行われており、具体的には、講演会の開催やビジネス学校の開校、インターンシップなどが行われていることを学んだ。また、それらが押し付けではなく、卒業生に意見を聞くなどしてニーズを把握し、フィードバックしていることに感心した。

JETRO では、ミャンマーでビジネス展開を考えている日系企業への情報提供や支援を行い、ミャンマーと企業との架け橋となる活動を行っていることを知った。また、先に述べたように電力不足や電圧が一定しない問題点があるため、製造業は少なく、サービス業が多いことがわかった。

ドリームトレインでは、初めに施設概要についてお話を頂いた。施設にいる子どもたちは、紛争や人身売買の危険がある地域、働き場がない地域からの子どもが多いとのことであった。9 割が両親、もしくは片親がいて、親がいない子どもは 1 割程度という点は意外であった。施設内を見学させていただくと、子どもた

ドリームトレインでミャンマーの化粧「タナカ」をしてもらった

ちが日本の曲を元気に歌っていたことに驚いた。昼食時には、勢いよく食事をかきこむ姿が印象的であった。配膳係がいて、日本の小学校の給食を思い出す光景であった。交流の時間には、折り紙やコマ、けん玉、ボールなどを使って積極的に遊んでくれたことが嬉しかった。最初は言葉が通じず戸惑ったものの、子どもたちの人懐っこさと、素直な笑顔に自然と打ち解けてしまった。最後に、みんなで一緒に盆踊りを踊り、大変楽しい時間を過ごせた。

BAJ では、生活用水供給事業である井戸堀の事例について詳細に教えて頂いた。成功事例ばかりではなく、事業を進める過程で様々な課題に直面し、うまくいかない場合も多いことが現状だそうだ。

## マレーシアでの研修（11 月 5 日～11 月 8 日）

ミャンマーからマレーシアに移動すると、日本の雰囲気に似ている印象を受けた。日本と同様に車が右ハンドル左通行だということも理由のひとつであろう。南下した分、ミャンマーより日差しは強いように感じた。マレーシアでは、JICA、JETRO、マラッカ・マレーシア技術大学（UTeM）などを訪問した。

JICA マレーシア事務所では、マレーシアへの経済協力の特徴として基幹インフラへの集中投資と東方政策のための支援が行われていることを知り、改めて JICA という組織が、それぞれの地域に合わせた活動を行っていることを実感するお話であった。

JETRO では、主にハラル食についてお話を伺った。注目産業のひとつではあるが、基準が厳格なため、日本での普及はまだ不十分だそうだ。これからに期待が掛かる分、大変興味深い分野である。

UTeM では、学生の皆さんに音楽と歌で歓迎して頂き、お返しに北海道についての紹介やよさこいの披露をした。日本語を勉強している学生との交流では、アニメや音楽を通して日本に関心を持ってくれていることが嬉しかった。また、同世代の学生が大きな目標を持って勉強に励んでいることに刺激を受けた。

## おわりに

8 日間の研修は大変内容の濃いものであった。国際協力の実態について学ぶことができたのはもちろんのこと、人生のプラスになったことは確かである。研修中に出会った方たちは、夢や目標・目的を持って今の仕事や生活を送っていて、どこか生き生きとした逞しさを感じた。私も今回出会った方たちのように、夢や目標を持ち、それに向かって努力していく前向きな生き方をしたいと思った。そしてそれが、何かしらの形で社会貢献に繋がっていけば幸いである。

## アジアの息吹を感じて

塩入　正行

職務として国際交流事業に携わっていることから、各国からの行政職員等とお会いする機会は多々ありましたが、実際に国情を知る機会はありませんでした。そこで、今回は、テレビなどでは伝えられていないアジアの国々の動きとその現実を視察すると共に、それらの国々の人々をどのように迎え入れることが求められているのかを知り、それを業務に活かすことを目的に、本事業の一員として初めてアジアの国々を訪問させて頂きました。

最初の訪問国ミャンマーは、経済発展が著しいマレーシア、シンガポールの２カ国とは大きく異なり、2011 年を境に、それまでの軍事政権から急速に民主化が進み始めたそうです。軍事政権下においても、道路等のインフラ整備は行われていたようですが、民主化による自動車の増加により、渋滞が恒常化しているため、高架道路の建設が急ピッチで進められています。そこで活躍している重機などは日系企業のもので、自動車だけではない日本の力を目の当たりにしました。

また、団員の 1 人が路上にゴミが落ちていないことに気づきました。改めて全員で見渡してみると、どの路上にもゴミが少ないことがわかりました。ガイドさんの話によると、身の回りをきれいにする国民性は日本人と共通しているとのことでした。

さらに、もう一つ、ガイドさんから忘れられない話を伺いました。「ミャンマーには物質的な豊かさがまだまだ足りません。しかし、それが全てではないと思います。昔の日本がそうであったように、ミャンマー人の心の豊かさこそが、訪れる皆さんの心を捉えて離さないのでは」と。その話の途中、赤信号で私たちの横に止まった運転手のおじさんが、車窓から写真を撮る私たちにほほ笑みながら会釈してくれました。その瞬間、全員がこの国のファンになりました。

次に訪れた多民族国家マレーシアは、国教であるイスラム教の「ハラル認証」制度を政府機関が行っており、民間で実施している他国と比べ信頼性が高いことから、認証を受けたマレーシア製品は他のイスラム教の国々へ輸出されています。

この他にも、マレーシア・マラッカ工科大学（UTeM)の学生さんとの交流の際に、イスラム教について学ぶ機会を得ま

信号待ちのおじさんから思いがけない歓待を受ける!?

した。日本では伝統文化である「着物」を着る機会は大変少なくなりましたが、女性の場合、マレーシアでは普段から「ヒシャブ」と呼ばれる頭を覆うスカーフに似たものがあります。数人の学生さんに話を伺ったところ、母親から譲り受けたものや友達と一緒に買い揃えたものなどカラフルな 10 種類以上のヒシャブを使い分けているとのことでした。厳格な教義に則らなければならないイスラム教を基本にした生活の中でも、女性らしく楽しんで身にまとっていたことがとても新鮮に感じました。また、生地を使い分けることで暑さ対策も行っているとのことで、不快には感じないということでした。

一方、学生さんたちからも質問を受けました。それは、「雪」についてでした。彼らは実際に見たことのない雪に対して、憧れていることを知り、普段、気にも留めないことが、異国では貴重な存在であることを実感しました。雪や自然といった北海道の資源を多面的に捉え、活用していく必要性を改めて強く感じました。

UTeM の学生との有意義な意見交換会

シンガポールでの視察で一番印象に残っているのは、統合型リゾート(IR)であるカジノでした。厳しいセキュリティーの先には、映画などで見聞きした喧噪なカジノはありませんでした。会場の照明は明るく、場内の安全が確保され、「賭博場」というイメージとはかけ離れた「大人の社交場」のような印象を受けました。このように現地を視察してみたことで、道民にも受け入れられる可能性があるのではないかと思う反面、「ギャンブル依存症」や地域社会への影響などについてもより知りたいと思うようになりました。

今回 3 カ国を訪れる機会を頂き、各国がしのぎを削り、先進国の仲間入りを果たそうとする「勢い」、さらに伸びようとする「勢い」を直に感じ取ることができました。特に、ミャンマーやマレーシアは、日本を手本に国家を形成しようとしていることに誇りを感じました。

今後、JICA や北大等からの研修員や留学生を受け入れるに際して、今回学んだことをしっかり活かして業務に励んでいきたいと気持ちを新たにしました。

今回、私たちを受入れて頂いた現地事務所の皆様、本視察団を企画して頂いた HIECC の皆様には厚くお礼申し上げます。

## 報告にかえての感想

西山　さとみ

3 カ国はどこも異なっていて、とても魅力的だった。感想が中心だが、報告といたしたい。

**ミャンマー**

アジア最貧国と称されるミャンマー。不思議と居心地の良い国であった。インフラはとても整備されているとはいえない。一日に 5，6 回の停電は日常茶飯事だ。水道水は現地の人でもあたることがあり、下水整備も遅れている。自動車の増加に伴って、渋滞が常態化している。それでも、また行きたい。この不思議な魅力は、おそらく出会った人々の人柄によるものだと思う。

行動を共にする時間が長かったのは、現地ガイドのサイさんだ。他に、バス運転手とバス手伝いの青年。彼らはいつでも穏やかで、目が合えば必ず笑顔で返してくれた。笑顔を返してくれるのは、彼ら観光業に携わる者たちだけではない。街中やレストラン、NGO の支援施設で暮らす子どもたち。どこに行っても、目があって知らんふりをする人はいなかった。まるっきり観光客である私たちに対し、誠実に接してくれたように思う。ミャンマーで最も印象的なものは、笑顔だ。

印象的な訪問先は、NGO 団体ジャパンハートが運営する子ども支援施設である。人身売買がはびこる地域や、貧しさから生活が厳しい家庭から子どもを引き取る。子どもたちには日本人の里親がつくそうだ。正直なところ、殺伐とした雰囲気を想像していた。大丈夫だろうかと緊張していた。ところが、施設に到着するとそんな心配は無駄なものだと分かった。施設までのあぜ道を通るマイクロバスに、子どもたちは人懐こい笑顔を向けてくれた。建物に入れば、「こんにちは」と日本語で挨拶してくれる。視線を合わせてくれる。子どもたちとの交流は、リードされっぱなしだったように思う。ボール遊び、折り紙、けん玉。自分から誘ってくれたり、控えめな子も、目を合わせると近寄ってきてくれた。ここでの時間は、私が楽しみと癒しをもらった時間だった。

非常にまじめで親しみやすい国民性。まちには輸入した日本車がたくさん走っていて、なんだか日本のようだ。目的がなくとも、また行きたい国だ。

シュエダゴン・パゴダを歩く少年僧

（ヤンゴン）

## マレーシア

マレーシアは、多民族国家である。情報としては知っていた。しかし、現地で実感したのは、「日本は日本人ばかりだ」ということだ。マレーシアは、多民族国家だった。

空港で迎えてくれたガイドのリンさんは、中華系マレーシア人。移動車の運転手さんは、マレー系マレーシア人だった。異なる民族同士が同じ国民であるということ自体が、不思議なように感じられた。二人はマレー語で会話をする。リンさんは、マレー語に加え、中国語と日本語、英語も話せるそうだ。1967 年に公用語が英語からマレー語にとってかわったため、国民のほとんどはマレー語と英語の両方を話せるという。多言語国家。ダイグロシア。知識はあったはずなのに、現実の多言語的な場面に出会ってしまうと自分が何も知らないように思えた。少し恥ずかしくなった。

民族が異なれば、宗教も異なる。マレー系の人々は基本的にイスラム教を信仰している。中華系の人々は仏教が多く、インド系の人々はヒンドゥー教が多い。そんなことを聞くと宗教対立は起こらないのだろうかと考えてしまった。が、しかし、彼らはとてもうまくやっている。お互いに信仰や立場を認め合い、尊重しあっているように感じた。

例を一つあげるならば、食べ物の問題だろう。イスラム教で口にしてよいと認められている食事は、ハラルと呼ばれる。豚肉の混入を中心として、加工方法や生産現場付近の環境までコントロールが必要だそうだ。なんとも手間がかかる。しかし、政府のハラル認証機関が、厳しく管理しているという。ムスリムだけでなく、国家全体でハラル食、ハラル表示が当たり前になっていた。異なる背景をもつ者に対してそこまで真摯な姿勢をもっていることに、感動してしまった。そして恐れながら、私は日本もこの姿勢を見習うべきだと思った。以前、テレビ番組で、アメリカからの旅行客がこんなことを言っていた。「日本に来ると、自分がアメリカ人だということはあまり自覚しない。しかし、自分が日本人でないことは強く感じる。」おおげさかもしれない。でも、おおげさでもないように思う。

## シンガポール

観光のみのシンガポールだが、十分刺激的なひとときだった。訪れたマリーナ・ベイ・サンズは、超高級ホテルに有名ブランドが軒を連ねるショッピングモール、カジノも備えた異次元の都会だった。江別の田舎で暮らし、東京さえも行ったことが無い私は、キョロキョロと顔を振り回し、さぞかし滑稽だったと思う。施設もさることながら、世界中からの観光客に見惚れてしまった。まるで「プラダを着た悪魔」のメリル・ストリープのように色気のある女性や、One Direction と韓国のアイドルが一緒にいるような青年たちもいた。時間の制限もあり、もっと行って、見てみたいところがたくさんだ。必ずまた行こう。

# ミャンマー・マレーシア海外派遣事業報告

三宅　正純

〇訪問国及び訪問地の概要

・ミャンマー連邦共和国

通称ミャンマーは、東南アジアのインドシナ半島西部に位置する共和制国家。1989 年までの名称はビルマ。ASEAN 加盟国、通貨はチャット、人口 5,142 万人、首都はネピドー（2006 年まではヤンゴン）。

北西はインド、西はバングラデシュ、南東はタイ、東はラオス、北東は中国と国境を接する。多民族国家で、人口の 6 割をビルマ族が占める。他に、カレン族、カチン族、カヤー族、ラカイン族、チン族、モン族、ヤカイン族、シャン族、北東部に中国系のコーカン族などの少数民族がいる。

・ヤンゴン

1983 年の統計によると人口は 2,458,712 人を数え、国内最大都市である。1989 年にラングーン（Rangoon）から改称された。名前は「戦いの終わり」を意味する。エーヤワディー川のデルタ地帯に位置している。

重要な交易地であり、米、チーク材、石油、綿、鉱石の輸出拠点である。主な産業は精米、木材加工、石油精製、鉄鋼業などである。

・マレーシア

東南アジアのマレー半島南部とボルネオ島北部を領域とする連邦立憲君主制国家で、イギリス連邦加盟国である。タイ、インドネシア、ブルネイと陸上の国境線で接しており、シンガポール、フィリピンと海を隔てて近接する。ASEAN の一員。

・ムラカ

またはマラッカ（英語：Malacca）は、マレーシアの港湾都市。マレー半島西海岸南部に位置し、東西交通の要衝マラッカ海峡に面する港市であり、ムラカ州（マラッカ州）の州都である。

・シンガポール共和国

通称シンガポールは、東南アジアの主権都市国家かつ島国である。マレー半島南端、赤道の 137km 北に位置する。同国の領土は、菱型の本島であるシンガポール島及び 60 以上の著しく小規模な島々から構成される。[2]同国は、北はジョホール海峡によりマレーシア

半島から、南はシンガポール海峡によりインドネシアのリアウ諸島州から各々切り離されている。同国は高度に都市化され、原初の現存植生はほとんどない。同国の領土は、埋立てによって一貫して拡大してきた。同島嶼には 2 世紀に定住が始まり、それ以降は一連の現地の帝国に属した。現代のシンガポールは 1819 年、ジョホール王国からの許可を得て、イギリス東インド会社の交易所としてトーマス・ラッフルズにより設立された。1824 年、英国は同島の主権を取得し、1826 年にはシンガポールは英国の海峡植民地の 1 つになった。第二次世界大戦の間は日本により占領され、1963 年にシンガポールは英国からの独立を宣言し、マレーシアを形成するため、他のかつての英国領と結合した。

〇感想

怠惰な生活から抜け出したい。いや、正確には現状から逃げ出したい一心で今回の海外研修に参加した。大学を卒業し、目的もないまま大学院に進学、気力体力精神力ともに乏しく「今やらなければならないこと」ができず半年が過ぎた。夏季休暇中とはいえ、やらなければいけないことが多々あるのに、なかなか手をつけられず、手をつけない自分を甘やかしていた。もともと逃避グセがある私は大学の掲示板でこの研修を知り、チャンスだと思い応募した。

ミャンマーの現状や JICA の活動などについて、実際に自分の目で見たり、スタッフの方の話を聞いたりすることができ、普通の観光旅行ではできない、貴重な経験になった。与えるだけの援助、形だけの援助がたくさん存在し、そのような援助は良い国を作る手助けをするどころか、その道を邪魔しているということを知り、考えさせられることが多くあった。

私にとって今回の研修で良かったことは、各国の人に出会い、学べたことだと思う。障害をものともせず、たくましく明るく一生懸命に生きているミャンマーの子達。自分の同世代なのに、自分にはないすごい行動力を持ったマラッカ・マレーシア技術大学の学生。そして、色々なことを教えていただいた団長、団員のみなさん。彼らから、本当に多くの刺激を受けた。自分はもっと多くの経験と勉強する必要がある。もっと人の役に立てるようになりたい。過去の自分に対して、もっともっと自分は頑張れる、頑張らなくては、と使命感が芽生えた。たとえ小さなことでも、自分にできるボランティア活動をずっと続けていきたいと思う。今回の旅で経験したこと、感じたことは、ずっと忘れない。本当に行ってよかった。

ミャンマー人ガイドのサイさんと

## ミャンマー訪問から学んだこと

森田　詠美

私は、今までほとんど国外へ出たことがなく、今回のこの研修が、私にとって 2 度目の海外経験となりました。この研修への応募を決めた理由は、初めての海外がベトナムとカンボジアを訪問するツアーで、今回の研修先のひとつであるミャンマーと近く、同じ東南アジアの国を別の視点から見たかったこと。そして、英語圏ではない多民族国家といわれる国々を訪問し、それぞれの国で人々がどのように共生しているか知りたいと考えたのがきっかけでした。インターネットなどを利用すれば、様々な情報を入手することができ、日本で生活しながら、あたかも自分が経験したような錯覚に陥ってしまう人がいると、日々感じていましたが、今回の経験は「百聞は一見に如かず」の思いを強くするものでした。

マレーシア、シンガポールでは、当然のことのように、街なかに見られる看板などは多様な言語で表示され、英語が飛び交っていました。また、たった数日間の訪問で、根本までは到底わかるものではありませんが、ベースに流れるものが違う人々が集まり、長い時間をかけ、今、一つの国となっているというのが私の持った印象でした。そこから学ぶことがたくさんあるはずなのですが、そこにいる間、私はただただ圧倒されていました。

私は帰国してからも、ミャンマーでのガイド、サイ氏と食事の際に、サイ氏がおっしゃった「日本はどこを見ても日本人だけで羨ましい」の一言が忘れられません。ほとんどの人が肌の色も同じ、髪の色も同じ日本で生まれ育ち、国外へほとんど出たことのない私にはその気持ちがわからず、とても意外な言葉でした。

ミャンマーは今回の研修で訪れたマレーシア、シンガポールとは異なり、公用語がビルマ語とされている国です。しかし、ビルマ族 70%、その他たくさんの少数民族からなる多民族国家であることから、各民族同士が会話するためにはそれぞれの通訳が必要だそうです。さらに、学校を建設しても、どの言語で授業を行うかが問題になり、教育がなかなか進まないと伺いました。ここにひとつ、サイ氏の言葉の理由があるのかもしれないと感じ、ミャンマーが、マレーシアやシンガポールのように、一つの国になるまでにはまだ先が長いのだろうと思いました。

その共通言語が徹底されていない中で、「ミャンマー日本人材開発センター（MJC）」は、中間管理職の方や経営者を主なターゲットとして、講義すべてを英語で行い、ミャンマーの将来を担う人材育成や人的交流を行っていると伺いました。多民族国家であり、英語教育が十分ではないにも関わらず、英語で講義を行うということを受け、ここ数年でさらに先進国、開発途上国を問わずグローバル化に拍車がかかっている現在、やはり英語は少しでも使えることが必要なのだと痛感しました。私のように英語に苦手意識を持っている日本人は多いと思います。私は、普段英語を使える人々に囲まれていますが、「全て通訳して

もらうこの環境に甘えている。苦手意識をもったままではいけない。」と強く感じました。ミャンマーでもそのうち公用語にビルマ語のほか、英語も加わるのかもしれません。

言語に限ったことではなく、過去の日本がそうであったように、ミャンマーの人々は教育に対して非常に意欲的で、いずれ日本は遅れをとるのかもしれないと、漠然とですが感じました。私たち日本人は、先人たちが築いてくださった経済的な豊かさの中で成り立っている生活に甘えていてはいけないと強く思いました。

また日本は、ミャンマーの政治的な問題で他の国が支援を中断していた時も、人材育成に協力していたそうです。日本は、伝統工芸や匠の技など社会で受け継がれていくものを大切にする優れた人材を育てることが得意です。しかし、残念なことですが、今の日本は、経済性や効率性を優先し、すぐに結果を求める風潮が強く、後継者の育成など、時間を必要とする事を切り捨てる傾向にあります。結果がすぐ見えないことへの不安もあるかもしれませんが、時間をかけることの大切さを再認識する必要があると思います。

今回ミャンマーで触れ合った人々は「勢い」という言葉とは対極にあるような穏やかな人々ばかりでしたが、ミャンマーの経済状況を考えると、日本はすぐに抜かれてしまうのではないかと感じてしまうほどの「勢い」がありました。また、マレーシア、シンガポールに住む人々はもちろん、穏やかだと感じたミャンマーの人々も、自分の人生を切り拓く意欲に溢れている人が多いと感じました。日本人は柔軟に物事を受け入れることが得意であると思いますが、苦手なことや挑戦することはしないという人が増えているのではないかと思います。かくいう私もその一人ですが、それではいけないと今回強く感じました。

当初の目的とは違った気付きをたくさん与えてくれたこの研修に参加して本当に良かったと思います。団を率いてくださった団長さん、一緒にいろいろな経験をしてくださった団員の皆様、マレーシアの大学「UTeM」での交流で披露するヨサコイの練習にも毎回参加してくださったトップツアー亀田さん、訪問各所との調整をしてくださった HIECC の皆様、研修先などお世話になった皆様に心から感謝申し上げます。

ミャンマー滞在中お世話になったドライバーとアシスタント。寡黙で働き者の好青年。

# 海外派遣研修団員名簿

（五十音順）

| No | 氏　　名 | 性別 | 職　業 | |
|---|---|---|---|---|
| 団長 | 加藤　修 | 男 | 団体職員 | 北海道国際交流・協力総合センター<br>交流・協力部長 |
| 団員 | 川田　真美 | 女 | 会社員 | |
| 〃 | 黒澤　幸 | 女 | 管理栄養士 | |
| 〃 | 塩入　正行 | 男 | 地方公務員 | |
| 〃 | 西山さとみ | 女 | 大学院生 | |
| 〃 | 三宅　正純 | 男 | 大学生 | |
| 〃 | 森田　詠美 | 女 | 団体職員 | |
| 添乗 | 亀田　文恵 | 女 | | トップツアー株式会社 |

## 平成２６年度海外派遣事業スケジュール

【派遣国】ミャンマー、マレーシア

| 日次 | 月日・曜日 | 都市名 | 時　間 | 交通機関 | 内　　容 | 宿泊地 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 11月2日<br>（日） | 新千歳空港<br>→ヤンゴン | 14:05<br>22:30 | KE766<br>KE471 | ソウル経由で(KE766 →17:20)<br>(KE471 18:30→ヤンゴン着 | ヤンゴン |
| 2 | 11月3日<br>（月） | ヤンゴン | 9:00<br>10:30<br>12:30<br>16:00 | | JICA訪問<br>ﾐｬﾝﾏｰ日本人材開発ｾﾝﾀｰ<br>JICAﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動視察（病院）<br>JETRO訪問 | ヤンゴン |
| 3 | 11月4日<br>（火） | ヤンゴン | 10:00<br>15:00 | | ｼﾞｬﾊﾟﾝﾊｰﾄ（子ども支援）<br>ﾌﾞﾘｯｼﾞｴｰｼｱｼﾞｬﾊﾟﾝ（自立支援） | ヤンゴン |
| 4 | 11月5日<br>（水） | ヤンゴン<br>→ﾔﾝｺﾞﾝ空港<br>→ｸｱﾗﾙﾝﾌﾟｰﾙ | 午前<br>16:00<br>20:15 | MH743 | 市内視察 | クアラルンプール |
| 5 | 11月6日<br>（木） | ｸｱﾗﾙﾝﾌﾟｰﾙ<br>→マラッカ | 9:00<br>11:00<br>午後<br>夕 | | JICA訪問<br>JETRO訪問（ｲｽｶﾝﾀﾞﾙﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ）<br>市内視察 | マラッカ |
| 6 | 11月7日<br>（金） | マラッカ | 午前<br>15:00 | | グループ研修（世界文化遺産）<br>ﾏﾗｯｶ・ﾏﾚｰｼｱ技術大学訪問<br>（青年交流） | マラッカ |
| 7 | 11月8日<br>（土） | マラッカ<br>→ジョホール | 午後 | | ｲｽｶﾝﾀﾞﾙﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ視察<br>シンガポール市内視察 | 機　内 |
| 8 | 11月9日<br>（日） | ｼﾝｶﾞﾎﾟﾙ空港<br>→仁川空港<br>→新千歳空港 | 1:30<br>8:40<br>10:05<br>12:45 | KE642<br>KE765 | ソウル経由で<br>新千歳空港着 | |

# 行　動　記　録

| 日付 | 発着・滞在地 | 交通機関 | 時間 | 内容 |
|---|---|---|---|---|
| 11/2<br>（日） | 新千歳空港 | | 11：30 | 新千歳空港　国際線ターミナル 3F<br>大韓航空カウンター前集合<br>HIECC 金子氏より現地へのお土産等を預かり、団員で分配 |
| | | | 12：00 | チェックインを済ませ、軽食を取る |
| | | | 13：15 | 手荷物チェックゲート内集合 |
| | 新千歳空港　→<br>仁川空港（韓国） | KE766 | 14：05<br>17：20 | 仁川空港へ向け出発<br>仁川空港到着　各自小休憩を取る<br>・出発ロビー内で誰かが充電している携帯電話が突然鳴り始めるが、私たち団員以外は誰一人反応しない |
| | 仁川空港　→<br>ミンガラーバー国際空港（ヤンゴン） | KE471 | 18：30<br>22：30 | ミャンマー・ヤンゴンへ向け出発<br>ミャンマー・ミンガラーバー国際空港へ到着<br>・ガイドのサイ氏と合流。サイ氏の流暢な日本語に全員驚きつつ、バスでホテルへ移動<br>・「ミンガラーバー」はミャンマー語で「お元気ですか？」の意味 |
| | ホテル<br>（HOTEL KAN KAW） | | 23：16 | ホテル到着<br>翌日のスケジュール確認後、解散 |
| 11/3<br>（月） | ヤンゴン市 | | 08：30 | ホテル出発 |
| | | 傭上バス | 09：00 | JICA ミャンマー事務所到着<br>・瀬戸氏がミャンマーの民族衣装「ロンジー」でお出迎えしてくださった。ミャンマーで JICA が行う活動の概要の他、ミャンマーが抱える問題等について伺う。 |
| | | | 10：00 | JICA ミャンマー事務所出発 |
| | | | 10：10 | MJC（ミャンマー日本人材開発センター）到着<br>・金丸氏、タムタム氏から MJC の活動についてお話を伺う。<br>・MJC は人材育成を行うため、講義や、合宿等を行っている。ミャンマーに合宿というものが無く、初年度は 6 名だったが、次年度は 30 名へ増えた。口コミで評判が広がっているらしい。 |
| | | | 11：30 | レストラン「TAING YIN THAR<br>Myanmar National Restaurant」で昼食<br>・１時間待っても料理が出てこない。他のテーブルには続々と料理が運ばれてくるも、私たちのテーブ |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | | | ルには４名分しか来ない。現地で活動しているシニアボランティアの大塚氏は活動現場の病院へ戻る時間が迫っていたため料理を断る。 |
| | | | 14：00 | レストラン出発 |
| | | | 14：10 | 大塚氏の活動現場「国立リハビリテーション病院」到着<br>・大塚氏の活動を拝見する。大塚氏から指導してほしいという患者の方がたくさんいらっしゃるそうで、この日も大塚氏の周りには患者さんがたくさんいらっしゃった。<br>・活動視察後、病院内も拝見する。リハビリテーション病院であるため、義足などの制作も行っており、技師の方々が色々な道具もみせてくれた。 |
| | | | 15：30 | 活動現場出発 |
| | | | 16：00 | JETRO 到着<br>・お話を伺い始めるとすぐに停電。ミャンマーに来て初めての停電だと伝えると瀬川氏から運がいいと告げられる。<br>・ミャンマーの現在の経済状況等を伺う。 |
| | | | 17：40 | JETRO 出発　ホテルへ一時帰宿 |
| | | | 17：50 | ホテル到着 |
| | | | 18：15 | ホテル出発 |
| | | | 19：05 | レストラン「La Maison 20」で夕食 |
| | | | 20：40 | レストラン出発 |
| | | | 21：00 | ホテル到着　翌日のスケジュール確認後、一時解散 |
| | | | 21：30 | ヨサコイ練習開始<br>・「よっちょれ」前半部の練習。練習部屋として借りたジムへ集まると添乗の亀田さんもいらっしゃる。一緒に練習してくれるとは思っていなかったため嬉しかった。 |
| | | | 22：20 | ヨサコイ練習終了　解散 |
| 11/4<br>（火） | ヤンゴン市 | 傭上バス | 09：00 | ホテル出発 |
| | | | 09：45 | ジャパンハート到着 |
| | | | 10：00 | 間違えて施設ではなく、事務所を訪れてしまったため再度移動開始 |
| | | | 10：25 | ドリームトレイン到着　施設見学<br>・男子棟と女子棟に分かれており、施設内を見学させていただいていると男子棟から「上を向いて歩こう」の合唱が聞こえてきた。<br>・聴いていた合唱が終わると子どもたちが腕組みを |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | | | して私たちの前を通り過ぎる。ミャンマーでは敬う相手の前で腕組みをすることが尊敬の意を表すそう。<br>・子どもたちが通う学校の授業が午前と午後に分かれるため、午後からの授業を受ける子どもたちが早めに昼食をとる。昼食のごはんとスープはおかわり自由で、ここのルールとして、人差し指だけを挙げるとごはん、中指も挙げるとスープのおかわりの意思表示となるため、配膳する子どもたちは忙しく動き回っていた。 |
| | | | 11：30 | 昼食<br>・施設内の食堂で、子どもたちと同じカレーをごちそうになる。カレーはもちろん、日本の佃煮？ふりかけ？のようなものがとても辛く、ご飯が進む。今まで食事をしたお店とご飯の炊き方が違うのか、一番ご飯が美味しかった。また、こんなに辛いカレーを小さいうちから食べているのか！と全員が驚く。 |
| | | | 11：50 | 昼食終了　子どもたちと交流<br>・折り紙やけん玉など日本らしい遊び道具を持参し、教えながら一緒に遊ぼうと思ったが、子どもたちのほうが上手で、反対に教えてもらいながら一緒に遊んだ。<br>・途中、女の子に手を引かれ部屋の奥に連れて行かれ、ミャンマーの女性や子どもがするお化粧「タナカ」を団員の顔に塗ってくれた。粉末を水に溶いて塗るそうだが、とてもいい香りで、気持ちのいいものだった。<br>・交流の最後に北海道の子ども盆踊りを全員で踊る。こんなに子どもがいたのか！と思うほどの人数になる。みんな見よう見まねで踊るが、最後まで笑い声が絶えない交流となった。 |
| | | | 14：00 | ドリームトレイン出発<br>・別れ際、全員が元気に手を振って別れる。 |
| | | | 14：55 | BRIDGE ASIA JAPAN 到着<br>・BAJ が行う活動概要と、現地の村で行う井戸掘りという草の根活動について、森氏より BAJ の好事例を参考にお話を伺う。 |
| | | | 16：20 | BRIDGE ASIA JAPAN 出発<br>・ショッピングをするか、ホテルに一度戻るか、ガイドのサイ氏と相談していると、BAJ 森氏とヨシ |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | | | オカ氏が「こんなに日本語が上手なミャンマー人を見たことがない」と話してくれた。 |
| | | | 16：50 | ショッピングセンター「ジャンクションスクエア」到着<br>・色々なショップが入っていた。食品はマーケット等と比較すると、多少高値らしい。ミャンマー名産である、食べるお茶のサラダセットやお菓子などを購入。 |
| | | | 17：20 | ショッピングセンター出発 |
| | | | 17：30 | レストラン「HOT POT」到着<br>・入り口で男性スタッフに班長が笑われる。ミャンマーではお化粧であるため、男性はしない「タナカ」を落とさずに来たためであったと班長の顔を見て女性陣が納得する。 |
| | | | 19：15 | レストラン出発 |
| | | | 19：30 | ホテル到着　翌日のスケジュール確認後一時解散 |
| | | | 20：00 | ヨサコイ練習開始<br>・前半部の復習と、後半部の練習。先生である団員、西山さんの教え方が上手で、なんとなく踊れるようになる。 |
| | | | 20：50 | ヨサコイ練習終了 |
| | | | 21：00 | プレゼン打ち合わせ開始<br>・北海道の紹介の為、北海道のお祭り、観光、四季についての写真を見せながら写真の紹介をする。団員それぞれ、どの部分を担当するか決めた。 |
| | | | 22：00 | 打ち合わせ終了、解散 |
| 11/5<br>（水） | ヤンゴン市 | 傭上バス | 09：00 | ホテルロビー集合 |
| | | | 09：10 | 渋滞でバス遅れ、ホテル出発<br>・車窓から市内視察をしながらパゴダへ向かう。途中雨が降り始める。 |
| | | | 09：30 | シュエダゴンパゴダ視察<br>・雨がひどくなる。パゴダ内は土足厳禁のため、バスで靴を脱ぎ、裸足でパゴダへ。<br>・曜日ごとにお祈りをする仏塔が異なるため、団員の生まれ曜日を順に回る。途中、ひどい雨の中でも座り込んでお祈りをする現地の方や、お坊さんを見る。信心深さに感服。 |
| | | | 10：40 | アウンサンマーケット到着<br>・マーケット内はたくさんのお店が並んでいて色々目移りしてしまった。強引な客引きが無いので、好 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | | | 感が持てた。 |
| | | | 11：55 | アウンサンマーケット出発 |
| | | | 12：15 | 中華レストランで昼食<br>・私たちと入れ違いで、現地の方の結婚式が行われるようで、ドレスを身に纏った女性がたくさん入店してくる。 |
| | | | 13：00 | レストラン出発 |
| | | | 13：40 | ミンガラーバー国際空港到着<br>・ガイドのサイ氏が、私たちの姿が見えなくなるまでずっと手を振り、見送ってくれていた。 |
| | | | 14：15 | 出国手続き |
| | ミンガラーバー国際空港　→ | | 15：30 | 搭乗開始 |
| | クアラルンプール空港 | MH743 | 16：00 | マレーシアへ向け出発 |
| | | | 20：30 | マレーシアへ到着 |
| | | | 21：00 | クアラルンプール空港で軽食 |
| | | 傭上バス | 21：50 | 空港出発<br>・雷が常に光っていて、いつも空全体が明るく光っていた。雨も降っており、スコールのよう。 |
| | クアラルンプール | | | ・途中、後ろから追ってきた車の仰々しい列を見て、みんなで「なんだなんだ」と話しているとガイドの林（リン）氏が「国王です。」と紹介してくれた。ハイウェイの出口で普通の車の列に国王の乗車する車が並び、普通に降りていく姿を見て全員で「庶民的だ」と感動（？）する |
| | ホテル<br>（DORSETT REGENCY　HOTEL） | | 22：30 | ホテル着 |
| | | | 23：00 | ヨサコイ隊列打ち合わせ<br>・団員の部屋で、班長と西山さんが隊列打ち合わせ。 |
| | | | 24：00 | 解散 |
| 11/6<br>（木） | クアラルンプール | 傭上バス | 08：30 | ホテル出発 |
| | | | 08：55 | citiBank ビル到着、セキュリティ通過 |
| | | | 09：10 | JICA 到着<br>・芳沢氏から JICA 概要及びマレーシアについてお話を伺う。<br>・立派なお土産も頂いた。 |
| | | | 10：30 | JICA 出発 |
| | | | 10：40 | JETRO の入るビルに到着 |
| | | | 11：00 | セキュリティ通過<br>・田中氏より、ハラルや、7 日視察予定のイスカンダルプロジェクトについてお話をうかがう。 |
| | | | 12：10 | JETRO 出発 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | | 12 : 20 | 昼食 |
| | | | 13 : 30 | 市内視察 |
| | | | 14 : 30 | マラッカへ出発 |
| | | | 15 : 50 | サービスエリアで休憩<br>・エンジンがオーバーヒートしかけていたため少し長めの休憩。お店でお菓子等を購入し、みんなで食べる。 |
| | マラッカ | | 16 : 10 | 出発 |
| | | | 17 : 50 | レストランで夕食 |
| | | | 18 : 50 | ホテル到着 翌日のスケジュール確認後一時解散<br>ヨサコイ練習 |
| | | | 20 : 00 | ・交流前日のため、隊列や振りの確認のために通しで二回程踊り、終了。 |
| | | | 20 : 30 | 一時解散 |
| | | | 21 : 30 | 団員の部屋に集まり、交流 |
| | ホテル<br>（MAHKOTA HOTEL MELAKA） | | | ・日本から持参したり、ホテル売店で購入したお菓子や飲み物を持ち寄り、色々と話す。 |
| | | | 23 : 50 | 解散 |
| 11/7<br>（金） | マラッカ | | 07 : 30 | 朝食、ホテル周辺散歩<br>・マレーシア語で散歩は「ジャランジャラン」というそう。 |
| | | 傭上バス | 09 : 30 | ホテル出発 |
| | | | 09 : 40 | オランダタウン視察<br>・壁一面赤い建物が立ち並ぶ。マラッカ（地名の由来となった）の木の実を労働者がかじりながら仕事をしていて、口から吐き捨てるため、壁が赤くなるのを隠すため赤く塗ったらしい。 |
| | | | 10 : 30 | ジョンカーウォーク視察 |
| | | | 12 : 00 | レストランで昼食 |
| | | | 13 : 00 | ジョンカーウォーク視察<br>・マレーシアのかき氷やエッグタルトを食べる。 |
| | | | 13 : 45 | 集合 |
| | | | 14 : 00 | 出発 |
| | | | 14 : 40 | UTeM 到着<br>・笑顔全開で温かく歓迎してくれた。 |
| | | | 14 : 50 | 先生挨拶 |
| | | | 15 : 30 | 学生発表<br>・歌や音楽を披露してくれる。 |
| | | | 16 : 00 | 団員発表<br>・ようやく人前でのよっちょれ披露。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | | | ・北海道の四季などを紹介する。色とりどりの花や雪の風景写真を見てもらうと、歓声があがる。 |
| | | | 16：30 | グループ交流<br>・団員 2 名 3 グループに分かれ、日本語を学ぶ学生と日本語で交流。<br>・交流後、大学からたくさんのお土産を頂く。 |
| | | | 17：40 | 大学で夕食<br>・食事をしながら学生と懇談会…と聞いていたが、先生数名と同じテーブルで食事をした。学生は別テーブルに数名いる程度だった。少し残念な気もしたが、先生達とは交流がほとんどなかったためか、と考える。 |
| | | | 18：50 | UTeM 出発<br>・バス内で頂いたお土産を開ける。男女別になっており、とても立派な物ばかりで団員一同大変驚く。 |
| | | | 19：30 | ホテル到着 |
| | | | 20：15 | ホテル周辺散策<br>・マッサージを受けようとジャランジャランがてらマッサージ店を回るが、一部の人の所持金が少なく、入れず断念。<br>・昼間は見なかった出店群に、みんなで驚く。<br>・展望タワーに上がり、上空からホテル周辺を見渡す。 |
| | | | 22：00 | 帰宿、団員の部屋で交流<br>・メインの交流が無事に終わり、団員と亀田さんとでお話。人生について先輩からいろいろアドバイスを頂く。 |
| | | | 24：30 | 解散 |
| 11/8<br>（土） | マラッカ | 傭上バス | 08：30 | ホテル出発　ジョホールへ |
| | | | 11：30 | 昼食 |
| | | | 12：30 | レストラン出発<br>車窓からイスカンダル視察 |
| | | | 15：00 | マレーシア出国手続き<br>シンガポール入国手続き |
| | シンガポール | | 15：30 | シンガポール到着、ガイド交代<br>市内視察 |
| | | | 17：30 | マーライオン前出発 |
| | | | 18：00 | マリーナベイサンズ到着<br>・レーザーショウ観覧。途中雨が降り始める。観覧後、カジノ、ショップを見学。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | | 21 : 30<br>22 : 00<br>24 : 45 | マリーナベイサンズ出発<br>シンガポール空港到着　各自自主行動<br>出発ゲート前に集合 |
| 11/9<br>（日） | シンガポール空港<br>→　仁川空港<br><br>仁川空港　→<br>新千歳空港 | KE642<br><br><br>KE765 | 01 : 30<br>08 : 40<br><br>10 : 05<br>12 : 45<br>13 : 20 | シンガポール空港出発<br>仁川空港到着<br><br>仁川空港出発<br>新千歳空港到着<br>団長から挨拶をいただき解散<br>各自帰路へ |

公益社団法人
**北海道国際交流・協力総合センター**
**ＨＩＥＣＣ／ハイエック**
（旧 社団法人北方圏センター）

Hokkaido International Exchange and Cooperation Center
Hokkaido Government Annex West-7,North-3,Chuo-ku
Sapporo,Hokkaido,060-0003 JAPAN
PHONE:+81（11）221-7840 FAX:+81（11）221-7845

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目（道庁別館12階）
TEL:011-221-7840 FAX:011-221-7845
URL:http://www.hiecc.or.jp
E-mail:hiecc@hiecc.or.jp